

A1 国 語

(五〇分)

答はすべて

解答用紙

に書き入れること。

【注意】 字数制限のある問題は、テン・マル・カッコなどの記号も一字として答えなさい。

一

次の文章を読んで、後の問に答えなさい。

小学校卒業間近のことだ。

僕は近所の下級生と小学校の校庭でサッカーをしていた。地域のサッカーチームの後輩達が自主練をしていたところへ、偶然、通りかかって一緒になったのだった。つい数ヶ月前まで、僕がキャプテンをしていたチームの後輩達だった。

引退した自分が後輩と一緒にサッカーをしていると思うと、少し大人になったような気がした。コーチじみたことを言っている、下級生五人程とサッカーに興じていた。

しばらく遊んでいると、中学生のグループが同じゴールでサッカーを始めた。最初は場所を分け合って、ゲームを続けていたが、次第に中学生が我が物顔で振舞うようになっていった。リーダー格の一人は、髪を明るい茶色に染めていて、時々僕を睨みつけながら、きついシュートをゴールに決めていた。

僕達のグループの下級生が蹴り損なったボールが、茶髪の中學生の方に転がっていった。取りに行こうとする下級生を止めて、僕は中學生に向かって走った。

「すみません」

声をかけて、蹴り返してもらおうとしたが、中學生はボールを足元に止めたまま声を投げた。

「おい、お前」

尖がった声だった。僕は「はい」と小さな声で答えた。中學生がフンと笑って、鼻で校庭の出入り口を指した。

「お前ら、もう遊びの時間は終わりだろ」

中學生は、僕達のサッカーボールを出入り口に向けて大きく蹴った。僕は転がっていったボールを目で追った。視野の隅に後輩達の姿が見える。皆、立ちすくんだまま、僕を見つめているのが分かった。

心臓が高く打つのを感じた。僕は、勇気を奮い起こして「後から来たんじゃないか」と言わねばならなかった。少なくとも、「半分ずつ使おう」ぐらいは言わねばならなかった。中學生が三角の目で睨んでいた。僕は、声を出せなかった。黙っていると、中學生が後輩達に叫んだ。

「お前ら、もう終わりだってさ」

僕は言葉を返せず、くると中學生に背を向けてしまった。後輩達が、僕のことを寂しそうに見ていた。僕は、後輩達に歩みよると、「もう、終えようか」と呟いてしまった。

……

その晩、食の進まない僕に、祖母が声をかけた。仕事で帰りの遅い両親の代わりに、いつも祖母が夕食の相手だった。

「何かあったんかい」

ぼつりと尋ねられて、僕は昼にあったことを話した。話し終えると、祖母は僕に尋ねた。

「一輝が、私に話したのは、どうしてだい？」

質問の意味が分からなくて、僕は黙っていた。祖母が穏やかな瞳で、僕のことを真っ直ぐに見つめた。

「その子が悪い奴だから、私に愚痴を言ったのかい？ それとも、自分が弱い子だから、私に相談したのかい？」

A2 国 語

僕は返答に詰まった。半々のような気がした。そう答えると、祖母は、

「一輝はえらいね」

と思いがけない言葉を言った。

「一輝は自分の弱いところに気がつけたから、えらい」祖母は目じりに皺を刻んで続けた。「「そういうことに傷つける力があるのは立派なんだよ。普通はあきらめちゃうんだ」」

「傷つける力」というのがよく分からなかったが、祖母の言葉は、とても力強く僕の背を押してくれたような気がした。

「今日、一輝が使い損ねた勇氣は、貯金しとき」

「貯金？」

『勇氣の貯金』だよ」

祖母は目じりの皺をもっと沢山刻んで、優しく笑った。

「今日、使い損ねた勇氣は、貯金しておくといいいよ。これからも同じだよ。使い損ねた勇氣は、いつも貯金しておくよ。いつか、もっともっと大切な場面で、きちんと一輝が使えるように、忘れずに貯金しておくんだよ」

祖母の言葉を聞いて、2 いくつかの間にか、僕はポロポロと涙を流していた。

地区の準決勝でゴールを決めて、後輩が僕に飛びついてきたときの映像が浮かぶ。決勝戦で負けて、泣きながら引退の挨拶をしたとき、真剣に僕のことを見つめていた後輩達の表情も思い出す。そして、今日、僕が中学生にすぎること背を向けてしまったときの、後輩達の視線も。

「馬鹿だね、一輝は」

泣いている僕を見て、祖母が笑っていた。

「もう一つ、いいこと教えてあげるよ。その『勇氣の貯金』はね、使っても使っても減らないんだよ。3 逆に増えていたりするから、魔法の貯金箱だよ」

……

「勇氣の貯金箱」を教えてくれた祖母が亡くなったのは、それから三年後、僕の高校進学が決まったときだった。

そうして、僕は、学生時代も今の会社に就職してからも、祖母の言った「勇氣の貯金」を貯めたり使ったりしながら、日々を過ごしている。祖母の言うように、増えているのかどうかは分からないが、ただ、忘れることだけはしないようにして、毎日を過ごしている。

【榎 邦彦『約束』（小説新潮）二〇〇八年四月号所収）より】

問一 —— 線1「そういうことに傷つける力があるのは立派なんだよ」とありますが、「傷つける力」とはどういうことですか。「そういうこと」の意味を明らかにしながら説明しなさい。

問二 —— 線2「いつの間にか、僕はポロポロと涙を流していた」とありますが、それにはどのような理由が考えられますか。説明しなさい。

A3 国 語

問三——線3「逆に増えていったりするから、魔法の貯金箱だよ」とありますが、この場合、ふつうの貯金箱とちがって使っても貯金が増えていったりするのにはなぜですか。その理由を説明しなさい。

問四 祖母の「僕」に対する言葉や態度からは、人間やその行いについてのどのような考え方がうかがえますか。説明しなさい。

二 次の文章を読んで、後の問に答えなさい。

日本人はお米ばかり食べてきたのでしよう、と外国の友人から聞かれることがよくあるが、日本人がお米を主食にしたのはむしろ近代になってからのことで、1それ以前はお米以外の雑穀がおもな食べ物だった。

このことは私自身の経験からも真実である。私の生まれ育ったのは、日本列島の中央部をつくりなす山がちの地方で、日本のなかでもどちらかというと貧しい田舎だった。この地方では「ほうとう」という郷土料理が有名だった。「ほうとう」のレシビ「調理法」はこうである。大きな鍋で鯛の小魚などの干魚を煮て出汁をとったスープに、ネギ・椎茸・里芋・カボチャなどの野菜をぐつぐつと煮込む。そこに小麦粉をこねて乱切りにした pasta「スパゲッティやマカロニなどをまとめた呼び方」状の麺を放りこむ。そして煮立ったところで、味噌を入れて味をつけると、「ほうとう」ができあがる。味噌で煮込んだ「うどん」とも言えるし、野菜スープに小麦団子を入れた食べ物、と見ることもできる。いずれにしてもまことに田舎風の「雑穀料理」である。

こういう食べ物を、この地方では貧しい人たちもお金持ちも、好んで食べていた。どの家庭へ出かけても、夕飯はたいがい「ほうとう」で、夜の食べ残しを翌朝温めて食べるとさらにおいしいというので、農作業に出かける前の農民の腹ごしらえもまた、この「ほうとう」だった。少年時代の私の記憶に生々しいのは、石油スタンドと米屋を経営するこのあたりではきわめて裕福だと言われていたS家に、ある夜泥棒が忍びこみ、お腹をへらしていたこの泥棒は主人一家の台所に忍びこんで、その夜の夕食の鍋を盗みだし、土間でそれをこっそりと食べた。翌朝事件を調べていた警察官たちは、土間に転がっていたその鍋から、昨夜の泥棒が「ほうとう」を食べてから逃走したことを知ったのだった。

お米がふんだんに手に入る家庭でさえ、ディナー「夕食」はその頃はまだ貧しい郷土食と見なされていた「ほうとう」だった（現在では「ほうとう」は観光客にも人気の郷土食となっている）。この噂はたちまち町中にひろがり、日頃なにかとひが目で見られることの多かったS家の人々に、2人々は急に温かい気持ちを抱くようになったように感じられた。「あの家の人々も私たちの仲間だったのだ!」。食べ物の持つ象徴的な力は偉大である。お米は「国民国家」の象徴であるのになして、「地域文化」を象徴するものは雑穀の料理だったのである。しかもそれは鍋でぐつぐつと長い時間をかけて「煮込んだ」料理でなければならなかった。

3 さてここからが面白いところである。日本列島には一万数千年も前から、高度に発達した土器をとまなう新石器文化がさかんだった。そこで発達した土器は厚手の粘土の表面に美しい「縄目模様」が描かれているので、日本人はたんに「新石器文化」と呼ぶのを好まず、自分たちの先祖たちの築いた文化を愛着をこめて「縄文文化」と呼んだ。その「縄文文化」がピークを

A4 国 語

迎えた時代の中心地が、私の育った中部山岳地帯だったのである。

近年になってこの地方にも高速道路が建設されることになり、その工事現場からつぎつぎと、おびただしい縄文時代の遺跡が出現した。遺物の保存状態は完璧で、数千年前にこのあたりで生活してきた人々の日常生活の再現も可能になってきた。とりわけ彼らがなにを食べていたのかということに、注目が集まった。保存状態のよいあの縄文土器の底には、スープ状になって固まった食べ物の残りが、こびりついたままだったものだから、考古学者が数千年前の食生活を再現するのは、さほど困難な作業ではなかった。

そうやって再現された「縄文食」を見て、このあたりの人々は驚いた。縄文時代の人々が主食としていたものが、自分たちの主食である「ほうとう」とあまりによく似ていたからである。もちろんずっと後になって中国からもたらされた味噌は、用いられていない。しかし岩塩で味つけされた野菜スープのなかに、ドングリの実をすりつぶして粉にしたものを団子にして、コトコトと長時間かけて煮込んだとおぼしきその「新石器料理」は、その料理のアイデアにおいて、数千年後の子孫たちが好んで食べているものと、まったく同じ精神に貫かれていたのである。

日本列島の各地に伝わる日常的・家庭的な「郷土食」の多くが、同じような事情をかかえている。組織的な灌漑システムをともなった本格的な稲作がはじまってからも、この列島では新石器的な縄文食との直接的なつながりが、保ちつづけられてきた。そうした料理の基本は煮物料理で、お米ではなく小麦や粟などの雑穀がそこでの主役である。お米はここでは、日常のものではなく、むしろ「聖なるもの」の領域に属する非日常的な食べ物であり、さらに言えば税金として権力に収納されていく一種の「貨幣」として、きわめて貴重な存在であったのだ。お米はいわば「都市」的なものの象徴であり、それにたいして人々の日常の雑穀の食生活は、コトコトと長い時間をかけて煮込まれた鍋の料理を中心にして、かたちづけられていた。そして鉄の鍋でつくる煮物料理と、厚手の縄文土器でつくられた煮物料理とのあいだには、あきらかな連続性を認めることができるのである。

この列島で、強い火に長時間かけても損傷しにくい厚手の土器を用いた食文化が発達した（しかもその文化は一万年以上も、ここで繁栄しつづけたのである！ こういうことはほかの新石器型文化ではおこらなかった）ことによって、ここには独特の「4 スローフード哲学」が形成されることになった。考古学者たちは、縄文料理がひどく手間ひまのかかる、スローフードの原型であったことをあきらかにしてきた。遺跡から発掘された調理道具や土器の底の残留物から推測されるのは、5 スープに煮込まれる野菜がこまかく切り刻まれていたらしいという、ほほえましい事実である。石のナイフと石の大皿を用いて、人々は時間をかけて採集してきた材料をこまかく刻み、それを熱した縄文土器に放りこんで、コトコトと何時間もかけて煮込むのである。

火と水とあいだに土器が媒介に入って、この媒介をなかだちにして、異なる種類の材料がひとつにとけあうまで、時間をかけて煮込む。このとき土器は、この列島に暮らした人々の理想であった「和」を象徴するものとなる。「和」とは「平和」であり「環」でもある。異質なものが個性や個人的権利を主張して戦いあうのではなく、長い時間をかけたネゴシエーション「交渉」をとおして、自分をおさえるべきところはおさえ、他のよい部分はすすんで自分のなかに取り入れていく、そして他を征服してしまうのではなく、巧妙な媒介をあいだにはさんで異なるもの同士が「環」を形成していく——日本列島の歴史には、ヨーロッパなどにくらべると驚くほどに「内戦」というものがおこらなかったが、そこにもこういう「和」の思想は生きてきた。その原型が、スローフードの典型のような土器料理のうちにすでに存在していたことを知るとき、私たちは料理文化の偉大さに、いまさらながら打たれるのである。

A5 国 語

問一 ― 線1「それ以前はお米以外の雑穀がおもな食べ物だった」とあるように、本文では「雑穀」が中心に述べられています。では一方、「お米」は日本人にとってどのようなものであったと書かれていますか。その説明として最も適当なものを次のア～オの中から選び、記号で答えなさい。

- ア 都会に集まる人々が個人的な楽しみとして食べるもの。
- イ 自分たちの文化の求めている理想が込められた神聖なもの。
- ウ 手間ひまをかけて調理する必要のない実用性に富んだもの。
- エ 特別な時に食べたり食べ物以外の役割を果たしたりするもの。
- オ 裕福な人々によってのみ日常的に食べられている高級なもの。

問二 ― 線2「人々は急にになにか温かい気持ちをいだくようになったように感じられた」とありますが、この気持ちを別の言葉で表現するとどうなりますか。漢字三字で答えなさい。

問三 ― 線3「さてここからが面白いところである」とありますが、どのような点が面白いのですか。その説明として最も適当なものを次のア～オの中から選び、記号で答えなさい。

- ア 日本古来の文化が偶然にも筆者の故郷で栄えていた点。
- イ 他国には見られない日本独自の調理法が開発された点。
- ウ はるか昔に営まれた食生活を正確に知ることができる点。
- エ 日本人が自ら作り上げた文化に特徴的な名前を付けた点。
- オ 縄文時代に見られる料理のあり方が現代にも通じている点。

問四 ― 線4「スローフード哲学」とありますが、これはどのような考え方ですか。「スロー」とは「ゆっくり」、「フード」とは「食べ物」、「哲学」とは「人生に対する考え方」の意味であることをふまえて、六十字以上八十字以内で説明しなさい。

問五 ― 線5「スープに煮込まれる野菜がこまかく切り刻まれていたらしいという、ほほえましい事実である」とありますが、野菜が「煮込まれる」だけでなく「こまかく切り刻まれる」ことに対して筆者はなぜ「ほほえましい」と感じたのですか。その理由を本文全体の筆者の考え方をふまえて、三十字以上四十字以内で説明しなさい。

三 次の文中の ― 線1～4のカタカナの部分の漢字に改めなさい。一画ずつていねいに書くこと。

争いごととは多くの場合、どちらの言い分にも1イチリある。まずは話し合いの2シンを決めてから取り組むべきである。そのうえで、自分の意見を3コジせずたがいに認め合いながら、解決策を4コウじていくのがよい。